

早稲田大学 文化構想学部 英語 講評

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	90分
特徴・その他	<p>大問5題は例年の問題と同じ。昨年Vの要約問題が一文を書かせるものから、出だしが書かれている英文に続けて4～10語で書かせるものに変更された。今年度も昨年と同じ形式が踏襲された。早稲田大学は法学部やスポーツ科学部を除き、一度形式が変更されると当分変わらない特徴がある。テーマに関しては、昨年同様人文科学から自然科学と多岐にわたっていた。全体の語数は昨年よりやや多め。レベルは全体的に昨年並みかやや難化したであろう。</p> <p>Iの適語補充問題は昨年よりやや難化か。少し難しい単語や熟語が狙われていた。IIの内容一致問題は昨年並み。読みにくかったことはなかったであろう。IIIの脱文挿入問題は昨年並みか。たまたまであろうが、化学の話がまた出題された。IVの会話文問題は難化か。結構悩ましい表現が狙われた。Vの要約問題は昨年並みと言えそう。出だしが書かれている一文を4～10語でまとめるわけなので、ポイントを見極める力が問われている。当たり前だが、ただらとまとめるような問題ではない。今年度も時間との勝負が大きな比重を占めるであろう。最後に、文化構想学部と文学部は同じ傾向を示すので、これから文学部を受ける受験生は、文化構想学部の問題に触れておくといいいだろう。要約問題の英文のパターンが似ていることがよくある。</p>

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	適語補充問題	英文の量は少し増え、英文のレベルは(A)が抽象的でやや難しかった。例年難単語や難熟語が少し狙われるが、今年は bombarded が難単語。選択肢はどうか対処可能なものがほとんどだが、内容もレベルが高く正解を出すのは結構大変だ。意外と例年はここでかなり落としてしまう受験生が多い。ここは隠れた勝負どころだ。A be entangled with B 「AはBと密接に絡み合っている」から(9)の前後が empire→imperial の関係を見抜くような類推はこの大問では非常に重要だと考えよう。	やや難
II	内容一致問題	英文量、難易度とも昨年並み。ここはあまり落とせない大問と言えるだろう。ただ、2箇所を見ないと答えが出ないようなものも散見された。また、(B)の pupils が意外な意味で、読んでいる途中で気づくことができるかがポイント。「生徒」の意味ではない。「(目の)瞳孔」の意味がある。とはいえ、ここは速度勝負の大問である。いかに時間をかけずに正解を導くかがこのポイントだ。	標準
III	脱文挿入問題	英文量は増加、難易度は昨年並みか。ここが苦手な受験生は本当に多い。基本的に1つ間違えると2つ間違える可能性が高いので、差がつきやすい大問だ。ここでいかに間違いを減らせるかがポイントになるだろう。今年度は選択肢に接続詞や代名詞が非常に少なく、内容から正解選択肢を選んでいく問題であった。ただ、 Indeed などをヒントにできるようになるといい。「実際」のような訳になるが、前後は同じような内容になると考えよう。 either A or B のような表現にも注意が必要。その後にAとBの具体例がそれぞれ出てくるかもしれないと推論する力は正解を導く手助けとなる。	やや難

番号	出題内容	コメント	難易度
IV	会話文問題	分量は昨年並み。レベルはやや難しくなったようだ。read up on ～、can't get enough of ～は正確には知らなくて仕方ない。You can't be serious. や I mean it. に Hang on a moment. は重要会話表現。配点は低いであろうが、ここで点数を稼ぐことが重要だ。文化構想学部や文学部の会話文問題の特徴は、簡単な単語から成り立っている選択肢なのだが、これが意外と難しいことがある。簡単な単語から成り立っている熟語も狙われる傾向が強いことを頭に入れておこう。また、選択肢の品詞の意識も重要だ。動詞の原形、三単現の s がついた動詞、過去分詞、副詞などで始まる選択肢なので、文法的に入るかどうか意識が必要だ。	標準
V	要約問題	英文の量は増えたが、レベルは昨年並み。一文でまとめるのではなくなったのが今年度も同じだった。要約の英文の出だしがすでに書かれていて、そこに4～10語から成る英語を書かせる問題。今年度の英文は最後から3番目の文の In fact 「(しかし)実際は」がポイント。逆接を表すことが可能だ。後ろの内容が重要となる。文学部、文化構想学部の要約問題はピンポイントでまとめることが肝心で、昨年からの変更でより一層その傾向が強くなった。	標準